

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | はじめに：福澤諭吉論の試み：アート・センター開設15年 / 慶應義塾創立150年を迎えて  |
| Sub Title        | Preface   |
| Author           | 前田, 富士男(Maeda, Fujio)   |
| Publisher        | 慶應義塾大学アート・センター  |
| Publication year | 2009  |
| Jtitle           | Booklet Vol.17, (2009. )  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000017-0005">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000017-0005</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## はじめに

福澤諭吉論の試み——アート・センター開設 15 年／慶應義塾創立 150 年を迎えて

大阪の適塾塾長であった福澤諭吉は 1858（安政 5）年、江戸へ出府せよとの江戸・中津藩邸からの藩命を受けた。そこで中津に帰り、母ほかに別れを告げてから、大阪に戻り、適塾の岡本周吉を伴って、10 月中旬に江戸に到着。すぐに江戸築地鉄砲洲の中津藩中屋敷に蘭学の家塾を開いた。この塾そのものはすでに存在したもので、松木弘安などを教師に迎えていたが、福澤はあらためてその運営を担い、塾長を岡本とする新しい塾を創設した。これが慶應義塾の前身としての学塾創立にほかならない。福澤は 23 歳の若き青年だった。

1858 年——まさに、わが国が近代化へむけて疾風怒濤の海に出航した年とみなしてよい。江戸幕府はアメリカ、英国、フランス、ロシア、オランダの五ヶ国とそれぞれと修好通商条約を、つまり安政五カ国条約を結んだ。この条約は、不平等な内容もさることながら、勅許のないままに大老井伊直弼によって調印され、仮条約となったために、間もなく安政の大獄、桜田門外の変といった国内紛争を引き起こした。

美術史の観点からすれば、わが国では浮世絵師歌川広重が 1858 年になくなり、1860 年に英国の画家チャールズ・ワグマン（1832-91）が『イラストレーテッド・ロンドン・ニュース』の特派員として来日し、やがて高橋由一、五姓田義松らに洋画技法を指導する時期である。ヨーロッパでは、ギリシア・ローマ神話やキリスト教など伝統的な題材をいっさい拒否するフランスの画家ギュスタヴ・クールベ（1819-77）がリアリズムを掲げて登場した。科学史・思想史では、進化論のダーウィンが『種の起源』（1859）を刊行し、ロンドンに亡命したマルクスが『資本論』の執筆に取りかかっていた時期である。

間もなく福澤諭吉は 1860 年にアメリカへ、1862 年にヨーロッパへ、そして 1867 年に再度アメリカへと渡り、近代市民社会の現実を体験しつつ、わが国の近代化を導く「文明論」の素地を学びとった。明治時代の幕開け（1868 年）と並行して刊行された『西洋事情』（1866-70）、『学問のすゝめ』（1872-76）、『文明論之概略』（1875）は、その最初の結実である。

幕末・明治期における福澤諭吉のこうした著作、ならびに思想家・ジャーナリスト・教育者としての活動については、無数の研究・論考が発表されてきた。この「偉人」について、たくさんの児童書や伝記が出版されているのも、興味深い。「マンガ・福澤諭吉」といったテーマは、美術史学からみても急務の研究課題のひとつであろう。

だが、専門領域的な研究に即してみると、福澤諭吉研究には、未開拓な分野

が少なくない。その最たる領域は、「福澤論吉の芸術論」であろう。

文明＝文化をどのように論じるかは、いささか図式的になるけれども、ロックやヒュームの「経験論的文明論」から議論するか、あるいは、ディルタイやリッケルトらの「精神科学的文化論」の視点から把握するか、その両者の立場で相当に内容のベクトルを異にする。福澤論吉自身の文明＝文化論の出自が英国の経験論的な基盤にある以上、やむをえないとは言え、そろそろドイツの「後進的」な「精神科学的」視点から福澤論吉を検証する議論があってよいだろう。それはおくとしても、文化論のなかでも「福澤論吉の芸術論」は、およそ議論が尽くされていない領域である。これは明確な事実にはかならない。文化論として、科学、哲学、宗教、芸術、法律、政治、経済、社会制度などを想定すると、ともかく「芸術」は従来の福澤論吉研究史において決定的に欠落した領域である。福澤論吉が芸術を論じるテキストを残さず、近代社会に果たす芸術の持つ役割についてさほど発言しなかった、と指摘することは、研究の欠落を正当化する論拠になどなりえない。福澤が自宅で家庭音楽会を開催し、ヨーロッパ的な「交際」を音楽に託した事実ひとつをあげても、研究課題は多い。

本特集号はその意味で、「福澤論吉と美術」をテーマとする福澤論吉研究史上でおそらく初めての挑戦的な試みである。

幕末・明治期美術研究を代表する学界のリーダーたる青木茂氏と酒井忠康氏、わが国の文化行政の中心として文化財保護審議会会長ほかを務められた西川杏太郎氏、『時事新報』を継承する産経新聞社の顧問で篤実な研究者でもある鈴木隆敏氏をはじめ、学外・学内の研究者の方々に、この困難なテーマに関する貴重な研究をご寄稿いただいた。心より謝意を表する次第である。

1858年から150年を閲した2008年11月8日、慶應義塾は創立150年記念式典を開催した。そして、まことに歴史の偶然としか言いようがないけれども、われわれのアート・センターは、2008年に開設15年を迎えた。

十分の一という単純な算法に、およそ意味など託しえないことは自明だ。とはいえ、大学という教育・研究体制の一部としての、つまり附置・附属研究所としての「アート・センター」の活動理念や15年間の実践的成果をいまここに振り返ると、十分の一という数字はそれほど無意味ではないだろう——あえて、そう問いかけてみたい。いや、若林真・鷺見洋一のおふたりの前所長と、また所員とともに、そう自負してやまない。なぜ無意味ではないのか。それは、福澤論吉の潑刺たる批判精神の少なくとも十分の一は継承しているつもりだからだ。本特集号刊行も読者諸賢にそう受けとめていただければ、幸いである。